

わが国の和牛繁殖経営における 自給粗飼料生産の変遷と今後の展望

京都大学大学院・長命洋佑

1. 問題意識と課題

わが国の畜産は、海外からの輸入飼料に依存し、土地基盤の拡大を伴わない飼養頭数の多頭化と高生産および高品質を追求してきた結果、世界に類をみない土地と切り離された加工型畜産の性格をもつに至った。本来的な畜産は、土一作物一家畜を結ぶ有機的な循環によって拡大すべきものであるが、わが国の畜産は、大量の輸入飼料に大きく依存した、極めて不安定で集約的な加工型畜産として進められてきた。そして現在、こうした海外からの濃厚飼料に強く依存した家畜生産由来の問題が様々な面で指摘されている。その一つとして、加工型畜産から自給飼料生産、特に自給粗飼料生産を基軸とした資源循環型畜産への転換による飼料自給率の向上が重要とされている。

以上の問題意識に基づき、本報告では、土地利用型畜産の典型である和牛繁殖経営を対象に、輸入濃厚飼料による配合飼料中心の飼料構造が形成された 1970 年以降の繁殖経営における自給粗飼料給与の変遷および今後の自給粗飼料生産の展望について検討してゆく。

2. 分析の方法

本報告では、上記の課題に対して以下の 2 つの小課題への接近を試みる。具体的には第一に、前者である繁殖経営における自給粗飼料給与の変遷について、「畜産物生産費」に記載されている給与量を用い 1970 年から 2006 年までの自給粗飼料給与の変遷を整理するとともにそれらの特徴・問題点を概観する。第二に、後者である自給粗飼料生産の今後の展望については、農林水産省が定めている「新たな食料・農業・農村基本計画」および各都道府県で出されている「酪農・肉用牛生産近代化計画書」で計画目標として掲げられている粗飼料給与率を用いて、その目標率を達成するのに必要な農地面積の試算を行った上で、今後の粗飼料生産の展望について検討する。なお、分析に用いた繁殖牛は、兵庫県の小型系統および島根県の大型系統を想定し、また粗飼料生産の作業体系として、1) イタリアンライグラスを想定した牧草、2) 放牧飼養、3) 飼料稲、4) 稲わらの 4 ケースを想定した。

3. 分析結果

以上、本報告の分析より明らかになった点をまとめると以下の 3 点となる。第一に、自給粗飼料給与の変遷では、1970 年には給与量の半分を占めていた野草は、採草や放牧地の利用減少によりその給与量が大きく減少していた。また、いも・野菜類や稲わらもその給与量は大きく減少していた。第二に、現在の自給粗飼料給与構成を想定した場合、必要な農地面積は兵庫県で 17a、島根県で 26a であり、1ha に換算すると 3.8~5.8 頭の繁殖牛の飼養が可能であった。最後に、目標率を達成させるための自給粗飼料生産の展望については、現在のわが国の農地面積を考慮した場合、イタリアンライグラスの作付拡大および耕作放棄地の造成による放牧により、自給粗飼料を基軸とした繁殖経営が可能であることが示唆された。